

特集

2016年度企画展 「災害の記憶をつなぐこと」

会期 2017年1月11日(水)→3月26日(日)
会場 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター資料室(西館5階)

本企画展は、大きな災害が発生した後に集め残されてきた災害資料と、それをつないできた人々と空間の全国的な状況を見ようとするものです。東日本大震災、新潟県中越地震、阪神・淡路大震災に着目し、①災害によって生まれた資料、②災害の記憶をつなぐ人々と空間の2部構成で、資料、拠点となる施設・場所、人々の活動を展示しました。本号の特集では、この企画展の概要を紹介します。

日本各地の災害と災害記念拠点

人と防災未来センター資料室は、阪神・淡路大震災が発生した後に、困難な被災生活等の体験・記憶を伝え、将来の安全な暮らしをつくるために役立つ災害資料を収集・保存・公開しています。2002年4月に開館し、現在では約19万点の一次資料(阪神・淡路大震災関連資料)を整理・公開、刊行物やチラシ・映像などの二次資料の登録も約4万点に上ります。

当館に限らず、大きな災害の後には、その出来事を忘れないために、災害記念拠点がつくられる例が全国各地で見られます。古くは記念碑や慰霊碑を建てることに始まり、近年では、遺構を残したり、記念公園を整備したり、伝承や教育を目的とする記念施設を設置したりと、さまざまな形態が生まれています。

明治以降、国内で生じた大規模な災害とその記念拠点到に注目して、主だった分布状況を整理しました。とりわけ記念拠点多い兵庫県南部地震(1995.1.17)、新潟県中越地震(2004.10.23)、東北地方太平洋沖地震(2011.3.11)では、災害の記憶をつなぐ資料・施設・人々の活動が、同様に展開していることがわかりました。



災害によって生まれた資料——震災をとりあげた文芸作品

1

自費出版 アマチュア文筆家

阪神・淡路大震災を取り上げた文芸作品には、アマチュアの人たちが書いた、ごく少数しか発行されていないものも多くあります。

普段から新聞・雑誌の読者投稿欄に投稿している主婦の方の文章をまとめた『くらしの万華鏡』(脇谷康子)や『忘れない』(久保田靖子)、自身の体験をもとにした小説『優しき街』『新しき街』『黄昏の街』『街のなかへ』『老境の光』(高橋明子)などがそうです。震災を機に、自分の書いたものを本にしておこうという気持ちから出版されたと思われます。

また震災で亡くなった妻子の思い出を描いた『ハートとリボン』(沼田茂生)、卒業論文を提出した直後に震災の犠牲になった女子学生への追悼文集『恵子、さよならも言わずに』(村田延子編)など、残された方々の尽きせぬ思いから出版されたものもあります。



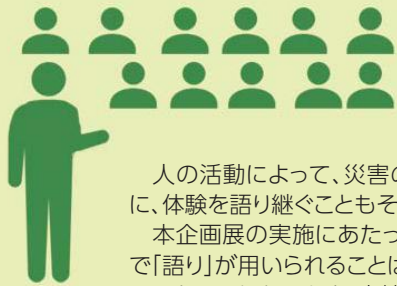
高橋明子さんのシリーズ。還暦を迎えてから被災した夫婦の生活の変化を、淡々と、しかし丁寧に描いています。

ミステリー

震災時、あるいは震災後の社会は、ミステリーとの相性が良いようです。『二階堂警視 夜明けの殺意』(斎藤栄)や『虹色のカレイドスコープ』(浅黄斑)では発災直後に起きた事件が描かれています。震災を背景とする事件について書かれた『神戸25メートルの絶望』(西村京太郎)や、震災時のある事件をきっかけに手を組む男女を描く『幻夜』(東野圭吾)、震災を経験したと考えられる女性を探る元新聞記者の奮闘を描く『神秘』(白石一文)など、事件が起こる要因に震災がとりあげられることもあります。



企画展では文芸作品の実物を展示しています。お手にとってご覧ください。



語り継がれる災害の記憶

2-3

人の活動によって、災害の記憶をつなぐことは行われます。碑を立てる、資料を残す、展示施設をつくるなど、ものを残すほかに、体験を語り継ぐこともそのひとつです。人と防災未来センターでは、ボランティアスタッフが語り部さんとして活動しています。

本企画展の実施にあたって、各所で語り部活動が行われているグループや施設をいくつか見てみました。防災・減災学習の場で「語り」が用いられることは多く、今回とりあげた3つの地域でも、語りとともに、まち歩きや震災学習のプログラムが用意されているところもあります。土地を知るときに、歴史のなかのひとつとして災害の記憶に触れる場合もあれば、防災学習を目的として災害の記憶に手が伸ばされることもあります。

人

語り手になるのは、震災を体験した人、被災地域に暮らす人など。聞き手になるのは、修学旅行生や観光客など地域に訪れた人、震災当時小さかった地元の小中学生などさまざまです。災害発生から復興に至る過程で、その場になかった人、覚えていない人へ体験を伝える「語り」が多いものの、地元の方々だけで語り合いを行っていた例もあります。

東日本大震災の被災地にある関上の記憶では、関上中学校で亡くなった生徒さんの遺族の方々を中心に地元住民による語り部の会が行われました。語ることによって、地震の記憶や気持ちを整理するのが目的です。現在は外部からの参加者も受入れ、共に学ぶ場にもなっています。公益社団法人みらいサポート石巻が行っている「震災の語り部」プログラムは、災害ボランティアとして訪れた外部の方々へのお礼として体験を話していたことをきっかけに始まりました。

場所

「語り」には聞く場所が必要です。現地で語り部さんと出会う、出張語り部さんを招く場合もあります。講演会のように大きな会場でたくさんの人が聞く場合や、少数で語り部さんを囲んで聞くこともあります。東日本大震災の被災地では、語り部さんが観光バスに同行して被災地を回るツアーがあり、タクシーの運転手さんが語り部となって現地を案内する「語り部タクシー」の認定制度も設けられています。中越の山古志村の震災復興資料館でもある郷見庵(さとみあん)は、震災復興への支援に対して、訪れた方にありがとうを伝える場として存在しています。お客さんを出迎える施設であり、あえて「語る」といわずとも、お茶を片手に土地の話をする、自然に、震災時の話が登場する場所です。

方法

体験談を語ることはもちろんですが、そのなかで写真などの資料を見せる、語る様子の映像を見る、音声を聞くなど、「語り」にもさまざまな形があります。

人と防災未来センターでは、語り部さんから直接話を聞くほかにも、体験の聞きとりインタビューや、地震当時子どもだった世代が語るユース語り部の映像を見ることもできます。中越の「おぢや震災ミュージアム そなえ館」では、館内にあるスポットで端末をかざすと体験談を聞くことができる仕掛けがあり、「大船渡津波伝承館」では、オリジナルの紙芝居を用いたお話も行われています。災害を体験した本人が語ることができない場合、インタビュー映像や手記、作品などは時間と空間をこえて、伝えるツールとなります。見せ方を工夫したり、体験のほか一般的な事実(被害の数字等)も語りに含めるなど、わかりやすく語る取り組みも見られます。震災を体験していない者による「語り」の取り組みとして、神戸学院大学現代社会学部社会防災学科の船木ゼミでは、学生が語り部さんから聞いた「語り」をもとに教材を作成しています。教材は小中学校への出前授業などで使用し、震災を知らない学生からさらに下の世代である子どもたちへと「語り」を継いでいます。



「語り」に触れてみよう!



- ・人と防災未来センター語り部ワークショップ 2017年2月より毎月17日に開催中!
「語り部コーナー」で語り部さんの講話を聞いてみましょう。

(毎月17日はセンターへの入館が無料です)



- ・DVD「KATARIBE」 語り部KOBÉ1995×神戸学院大学船木ゼミ発行★
- ・DVD「阪神・淡路大震災～ろうあ者の1.17～」(手話版・字幕版)
- ・DVD「ありがとう」 山越住民会議発行2008年★
- ・DVD「1000年の山古志」 「1000年の山古志」制作委員会発行2009年
- ・図書「16歳の語り部」 雁部那由多 津田穂乃果 相沢朱音 佐藤敏郎 ポプラ社2016年
- ・DVD「震災を語り継ぐ人びと」 宮城県名取市発行2015年★

★資料室で貸出可能



いま自分の前にいる人、起こっていること、立っている場所を見つめ、「語り」に触れることは、直接には体験できない過去の災害で起こったことを知ったり考えたりするきっかけになります。本号で紹介した災害の記憶をつなぐさまざまな試みが、みなさまのこれからの学びに役立つことを願っています。

集める・残す——文字資料にみる災害

このコーナーでは、文献・歴史資料を収集・公開している機関・施設を紹介しています。

東日本大震災では、**仙台市民図書館「3.11震災文庫」**です。ここでは、出版社から公刊されている東日本大震災関係の書籍は開架で公開。オリジナルが1つしかない書籍や調査報告書、避難所やボランティア団体などで出されたローカルメディアなどは閉架図書・資料としています。特に収集が困難な民間の企業や団体、個人が作成した資料を重点的に収集しています。これらの資料はできるだけ原資料で公開できるように整理し、デジタルアーカイブとの棲み分けを図っています。

新潟県中越地震では、**長岡市立中央図書館文書資料室**です。この資料室は、郷土の歴史史料を未来に伝えるため、市域の古文書や関係する図書・歴史公文書などを収集・保存しています。文書資料室では、新潟県中越地震発生直後から「歴史的資料の救済」と「震災関連資料の収集」を二本柱とした災害対応を行ってきました。収集・保存した「被災歴史資料」と「災害復興関連資料」を再編成し、2014年10月、「長岡市災害復興文庫」を開設しました。将来的には、災害関係の歴史公文書を加え、三本柱にすることを目標としています。

阪神・淡路大震災では、**神戸大学震災文庫**です。神戸大学附属図書館では、災害復興や地震研究・防災対策などのため、震災にかかわる資料を広く収集し、1995年10月に「震災文庫」として、公開を始めました。震災文庫の収集資料は、印刷資料のほかに、電子資料(CD-ROM等)・ビデオ・録音カセット・マイクロ資料・写真・地図など多岐にわたります。また、震災文庫では、デジタル化を積極的に行い、公開しています。2009年1月より、震災文庫と、人と防災未来センター所蔵の図書資料の横断検索が実現し、2012年3月には兵庫県立図書館が参加し、3館の震災資料が一括で検索できるようになっています。



長岡市立中央図書館文書資料室

2-2

見せる——非文字資料にみる災害

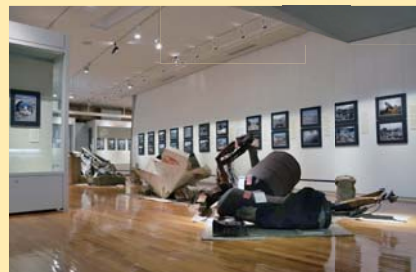
このコーナーでは、「モノ資料」を収集している機関を紹介しています。

東日本大震災では、**リアス・アーク美術館**です。ここは、宮城県気仙沼地域の「食」を軸として歴史、民俗資料を紹介する「方舟日記」、東北・北海道在住の作家を中心とした「収蔵美術作品展」を常設展示するアークギャラリー、「東日本大震災の記録と津波の災害史」と題し記録資料などを展示する企画展示室などの複合的機能から成っています。

東日本大震災後は津波被災物の収集・保存を本格的に行っています。また、災害の展示だけ見ても、地震・津波災害がどのようなものであったか、歴史的視点では理解できないので、歴史・民俗常設展示と災害展示をセットとして展示を構成しています。

新潟県中越地震では**長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」**です。この施設では、被災地である中越地域を情報の保管庫とする「中越メモリアル回廊」の入口として、震災の被害から復興の軌跡まで、膨大な情報が集められています。シアターでは中越地震の映像と関係者のインタビューで構成された発災から復興までの記録を上映しています。施設の床には中越地震発生から数日後の航空写真があります。iPadを持ち、その上を歩くと画面上に3Dのアイコンが出現します。それにふれれば、どこでどんな被害があったかなど、資料が表示されます。

阪神・淡路大震災では**北淡震災記念公園**です。公園内にある野島断層保存館は大震災時に地表に現れた野島断層を館内にそのまま保存・展示し、解説しています。また、第二次世界大戦の神戸大空襲や阪神・淡路大震災に耐えた神戸市長田区の防火壁を移築した「神戸の壁」、民家の敷地内を横切る断層や地震発生直後の建物の様子をそのまま紹介する「メモリアルハウス」、地震の仕組みや津波のシミュレーション映像など地震を学べる「グラグラボ」、阪神・淡路大震災と東日本大震災の揺れの違いが体験でき、震災や津波についての映像も上映する「震災体験館」が併設されています。



リアス・アーク美術館



きおくみらい



北淡震災記念公園

近年の自然災害と史料保全活動

歴史資料のうち、文化財に指定され、博物館や資料館で保存されているものは多くはありません。特に江戸時代のもの多くは、かつての村役人や代官の家などにそのまま受け継がれています。

1995年の阪神・淡路大震災以降、自然災害の後には民間所在の歴史資料の保全活動が行われるようになりました。近畿地方の若手の歴史研究者たちが集まって被災史料の救援に乗り出したところから、歴史史料ネットワーク（「史料ネット」）が結成され、被災地全域でのレスキュー活動に展開していきます。その後各地で自然災害が発生すると、史料ネットを参考に現地でもネットワークが形成されるようになり、被災地外のものも含めると現在その数は20を超えています。

2015年2月、史料ネット設立20周年を記念して全国史料ネット研究交流集が開催され、各地でのユニークな取組みが報告されました。その後2016年3月に第2回、同年12月に第3回が開催されています。第2回までは報告書もありますのでぜひご覧ください。

2011年の東日本大震災では文化庁主導のもと、被災文化財等救援委員会が設置され、被災史料の保全活動にあたりました。東北地方には2003年7月の宮城県北部の地震を契機に宮城歴史資料保全ネットワークが設立されており、民間史料の所在調査を継続的に行いました。その後も各地で歴史資料保全のためのネットワークが形成され、被災史料の救出活動の実働を担っています。

2014年7月、国立文化財機構内に文化財防災ネットワーク推進本部が発足しました。同じ年に九州・山口地方の博物館が連携して防災・危機管理に関する研修事業を行う「みんなでもるミュージアム」（翌年から「みんなでもる文化財みんなをまもるミュージアム」に改称）も始まっています。

文化財防災に関するネットワークの形成が進む最中の2016年4月、熊本地震が発生しました。直後に熊本大学を事務局とする熊本被災史料レスキューネットワークが結成され、既成のネットワークの助力を得ながら活動を開始しています。阪神・淡路大震災から20年あまりの間に、被災史料の保全に関する取組みは確実に高まっています。

新着資料



救援物資輸送に関する写真アルバム（資料番号：499-001001）

2017年1月17日、大阪府にお住まいの宮本大輔さんから、お父様が持っておられた写真を寄贈いただきました。昨年夏に亡くなられたお父様の遺品を整理されていたところ出てきた写真で、阪神・淡路大震災当時の救援物資の輸送に関するものです。

宮本さんのお父様は食品会社で輸送のお仕事をされていた。またライオンズクラブにも参加されており、震災直後から救援物資の食料の輸送を始められました。写真には、山積みになった救援物資のダンボール箱や、物資がトラックからたくさんの人々の手で運び出される様子、緊急輸送車両用標章と復興標章のついたトラック等が写っています。



山積みになった救援物資のダンボール箱



物資がトラックからたくさんの人々の手で運び出される様子

復興物資輸送車両許可証の実物は、西館3階のスポット展示「震災資料のメッセージ2016.1.17と鉄道・道路」で展示しています（3月末終了予定）。あわせてご覧ください。



復興物資輸送車両許可書
2600429-000001 加納康之氏寄贈



震災資料をお持ちの方に

人と防災未来センターでは、現在も震災資料の収集を続けています。震災後、すぐには手放せなかったものの、震災の出来事を伝えるために活用したいとお考えの方は、ぜひ一度資料室までご相談ください。



(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

DRI 人と防災未来センター 資料室

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
人と防災未来センター西館5階

TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30～17:30(展示施設とは時間が異なりますのでご注意ください)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌平日) 12月29日から1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます

